

一般研究 研究報告書

一年度研究報告

研究課題

宗湛日記にみる茶の湯の空間と所作の総合研究

(公財)文化財建造物保存技術協会 顧問

伊藤 延男 研究代表

一、研究の発端

本研究の発端は、現在も「宗湛日記を読む会」の中心的メンバーとなっている伊藤、小林の呼び掛けによって始められた宗湛日記を読む有志の勉強会であった。以来『茶道古典全集』第六卷（淡交新社、昭和四二年一二月）に収録されている活字本をテキストとして、約一〇ケ年にわたり、読書会の形式を以ておおよそ毎月一回のペースで進められた。この刊本には、周知の通り懇切丁寧な注釈が多数入っており、多くの知識を得ることができたのであるが、しかしそれでも、読みゆくうちに、意味の通じにくい箇所が諸所に散見されるようになったのである。それらのうちの代表的な例を挙げれば、

① 図版（印形）の脱落（茶道古典全集本一三五頁）、および書入れ文字の不端正。

② ヤキ茶碗二道具仕入テ、水覆二入テ、此水覆ハカウライ（高麗）ノマル也、古キヲ（緒）也、見クルシキ也、（茶道古典全集本三三五頁）

③ 一、引切ハ青竹也、スツテ敷竹ナリ、（茶道古典全集本三三三頁）

④ 天目ヲ前にヨセテ、山形二畳ノヘリヨリ七八メホトニ（茶道古典全集本三六九頁）

等である。それらの多くは、この茶道古典全集本編集の際に校合に用いられた史料編纂所謄写本や、その後に偶目するところとなった劉家影印本（解題及び新活字本とも）（『宗湛茶湯日記』西日本文化協会、昭和五九年八月）によって適切に読むことができた。たとえば、①では脱落した図版を補うことができたし、③はメツラシキ、④は山形ニ（片仮名のニ）であることが判明した。②は特殊な例であるが、このところを読むと、誰しも人子点での不細工な点前を批判した文であると直感するのである。従って、ヲの傍注として付けられた（緒）は削除すべきであると考えられた。

以上の経験から、もっと広範に諸本を調査すれば新たに判明する事項も多いのではないかと推測されるようになった。

二、宗湛日記内容一覧表（日別）の作成

読書会の実施と並行して、「宗湛日記内容一覧表（日別）」を作成した。何しろ宗湛には膨大な数の茶会、宴会（尤も茶会とか宴会とかいう言葉は宗湛日記には出てこない。「御会」と「振舞」のどちらかである。内容から考えると、御会は懐石と抹茶（濃茶、薄茶）の提供を内容とする会であるから、今日の正式な茶会と同じである。これに対し振舞は料理酒飯の提供であって、今日いう宴会に相当する）の記事が出てくる。本研究では、御会だけを対象とするのを原則としたが、振舞も参照しているので、ここではすべての茶会、宴会を取り上げることとした。この一覧表の作成は、主として有里が担当した。

一覧表に取り上げた項目は、①年月日（元号・年・西暦・月・日）、時刻、②関係者、場所（客・亭主・屋敷）、茶室（平面・床の間）、③道具（炉廻り・茶壺・釜・水指・茶器〔濃茶、薄茶〕・茶碗〔濃茶、薄茶〕・建水・蓋置・その他）であり、これに茶会の流れを示すト書と、出典を示す欄を加えた。

この一覧表の特色は、時系列にまとめたことである。これは、宗湛の一日一日の行動を詳細に知るためであって、一日を大項目とし、朝から夜咄までを中項目として並べ、さらに小項目として会の最初から、手水以後、さらには濃茶、薄茶と、茶会の流れがよく理解できるように配列した。

このような日別の表を宗湛日記全巻に亘って作成したので、その分量は膨大となった。しかしパソコンを用いて作成してあるので、希望事項を自由に検索できるシステムとなった。これは大きな成果であり、近年における「機器の発達に負うところが大きい。尤も、後述するように、新出の多くの写本類との校合により修正、補訂が生ずることになるので、現在は未定稿の段階に止めている。

付表第1表に示したのは、現段階における標準的な一日の一覧表である。

二、堺、博多の現地実査

今回幸いに助成金の交付を受けることができたので、本年度京都、堺、博多について現地調査を実施することができた。その主たる目的は、次項に述べる新しい写本のコピー等資料の収集であつ

たが、同時に、堺や博多の地勢や宅地割を実査し、いわゆる土地勘を得ることもあった。その結果を述べれば、まず堺においては、著名茶人の住居跡という場所が特定されており、それらがかなり近接した位置にあることが判明したので、宗湛が一日のうちに数力所の茶会を巡り歩くことも不可能ではないことが想像できた。しかし堺は、宗湛時代以降に大火により全焼し、町割りが大きく変更されている上、抛るべき資料としては、元禄大絵図を遡るものはないので、宗湛当時の実態に迫ることは、当然ながら、不可能であった。次に博多では、神谷家宅の旧跡という場所が特定されており、これを現地について観察すると、地勢は先が海に向って緩斜面をなしており、歴史上のある時期における海浜砂浜であったことが彷彿とした。恐らく古くは、博多といえども岩壁に大型船が横づけ出来るような港湾ではなく、沖に停泊した本船から小舟に移された物資が砂浜に陸揚げされ、そこに面した裏木戸を経て有力商人の邸内倉庫に直接搬入されたのではないかと思われる。このような海—砂浜—宅地の相関関係は、古い漁港に残る網元宅地からも類推されるところである。以上いくつかの成果はあったものの、いずれも心証の段階に止まらざるを得なかったのは残念であった。

三、写本類の博搜

第一節に述べたように、茶道古典全集にある活字本（劉家本を元とする）の他にも多くの写本があった、相互に校合する必要があることは以前から認められていたのであるが、たまたま伊藤と中村の旧勤務先である東京文化財研究所において、今では稀覯本の類に入る益田孝が関わった『博多宗湛日記』（審美書院、大正十年十月 平岡浩太郎蔵本の活字本）があるのを発見したのを手始めに、中村は、コンピュータによる検索や、古文書に詳しい人々に尋ねるなど、様々なルートを通じて博搜した結果、現存するか否かを問わず、また写本、活字本の別を問わず、はたまた重複の恐れも意に介せず、探し得た総てを列挙してみると、実に三十数本の存在が確認されたのであった。その名は付表第2表に示すとおりである。中村は、これらのうち現存するもので比較的書写年代の古いものを拾い集めてそれぞれの全文をデータまたはコピーの形で収集することに成功した。

幸いなことに、現在では主要な写本は多く史料編纂所の様な古文書館的組織、国立・公立図書館、博物館等に保管されており、多くはすでにインターネットやマイクロフィルムを通じて公開されていたり、或いは閲覧が可能であったりして、思いのほか短時間に主要写本のデータを手入手することができたのである。

さてこの集積された資料を検討してみると、

- ① 宗湛日記原本と思われるものは存在しない。
- ② 書写年代が判明する写本もその数は少なく、

1. 慶応図書館本（旧朝吹氏所蔵本） 元禄三年

2. 劉家本 書写年代は不明ながら、神谷家系図や古記録から一八世紀初頭に生を享けた神谷家の娘が劉（元笠）家に嫁入りした際に持参したとの伝えがあるので、その際書写したと考へ、且つ一五歳から二〇歳までの若さで嫁入りしたと仮定すれば、およそ享保時代ごろの書写となろう。尤も家蔵の古写本を持参したのではないかとの考へもあり、また茶道古典全集編集者のようにさらに後代の書写とみる説もあるので、俄かに決定はできない。

3. 国会図書館蔵の一本には、明和三年大橋遅松書写の跋文がある。

4. 今日庵文庫本には、安永六年書写したとの奥書がある。

このように、宗湛日記の写本は、古くて一七世紀極末から一八世前半を通じ、多くは一八世紀後半に世に少しずつ流布したものと解されるのである。

四、日毎文献比較表の作成

こうして選び出されたおよそ一九世紀前半以前のものがコピーの入手できたものに明治以降の書写本のうち史料編纂所影写のように間違いないものを加え、これらを相互に比較し、校合することとした。しかし何分大部であるので、これらを日毎に切り張りし、比較の便とし、これを日毎文献

比較表と名付けた。この表も大部であるので、付表第3表はそのうちの一日分を例として表示したものである。

この比較表の作成は、財満が担当したが、やってみると様々な困難が発見された。というのは、天正一四年、一五年は各本とも整然と順序がそろっていて、日毎に分けることが容易であるのに対し、天正一六年以降は、秀吉の九州征伐と続く朝鮮出兵といった政治情勢の変化、それに伴う宗湛の多忙な生活等によってか、日付に錯簡が次第に目立つようになり、且つ日々の記述も簡単になってゆく。それ故、切り張りが難しくなってきた。そこで現在は、天正一五年末で一旦止めているのが現状で、今後逐次追加してゆく予定である。

以上「宗湛日記内容一覧表（日別）」と「日毎文献比較表」とが完備すれば、宗湛日記に関するあらゆる情報が容易に入手出来るようになるかと期待される。

五、写本類の再吟味

これまでは書写年代が新しいものを、たとえば一九世紀の書写にかかるものを価値が低いと切り捨てていたのであるが、考えてみると必ずしも妥当ではない。特に「続群書類従本」の排除はいかなるものかとの疑問が生じて来た。続群書類従本は、一八世紀に大坂のコレクターとして著名であった兼葭堂の所蔵本が元である。これが彼の死後江戸の昌平坂学問所の蔵本となり、それを元として木版に付されたものが続群書類従本であり、引いては現在の活字本となっているのである。

周知のように、続群書類従本には多くの省略箇所があり、また表現も他本と異なるところがあるので、従来いわば無視されてきたきらいがある。しかしながら、続群書類従本の由緒正しきに加え、学問所蔵書が、明治以降内閣文庫から公文書館へと引き継がれているのが本筋であったにもかかわらず、種々の理由があつてか、現在では宮内庁、公文書館、東京国立博物館等名だたる機関に所蔵されてきた歴史を考えると、簡単に無視できない存在になっているのである。

かように考えて、付表第2表である写本一覧表を眺めてみると、宗湛日記本文は、総ての写本が天正一四年彼の松浦出発を以て始まるのは当然ながら、その末尾が

1. 天正二〇年で終わっているもの
2. 慶長四年で終わっているもの
3. 慶長五年で終わっているもの
4. 慶長一八年で終わっているもの

に大きく四分類されることが判明した。この内1.に入るのが続群書類従本系統である。また宗湛日記には『神屋宗湛日記献立』あるいは『宗湛茶会献立日記』なる別冊があるのであるが、これが付属するのは4.の慶長一八年まで本文がある写本に限定されているのである。

このように考察してみると、今までもよく云われていたように、慶長五年に黒田家が博多を領することとなった時、神谷家に対し日記を提出するよう命じたので、急遽提出したのが1.ではなかったか。それに対し黒田家は不十分とみて引き続き調査を命じたので、日記は順次補訂、改良され、ついに4.の形態になったのではないだろうか。この時、献立日記も整備されて日記の一部に編入されたのであろう。

更に云えば、もう一つの疑問として、いわゆるハリ紙（点前の所作を書きとめたもの）の問題がある。山内本（史料編纂所贈写）が天正一四年の分（九件）だけに止まっていることは不審であるが、4.に属する国会図書館本（遅松本）では、全体が一〇巻に編集されて いるうち、一〜四巻が茶会記、五〜七巻がいわゆるハリ紙の部類、そして八〜一〇巻が献立日記となっているのを見れば、天正一四年から慶長一二年までの分（二二四件）が存在したいいわゆるハリ紙も、この時追加され、本文、献立日記、ハリ紙の三部作として完成を見たのではなからうか。

ついでに述べておくと、戦前の美術雑誌『茶わん』五九号（昭和一二年十月）には、劉家所蔵として、宗湛日記、献立日記、見聞書の三部があると報じられている。劉家本も4.に属することを考えると、この見聞書もいわゆるハリ紙であろうことは十分想像される。しかしまだ調査の機を得ていないの

で、これ以上の事は差し控えたい。

六、これまでの成果と今後の課題

顧みれば我々の「宗湛日記を読む会」の目標は、日記に書かれた内容を分析し、理解することであった。しかるに、思いもかけぬ多種の写本の出現により、われわれが当初はむしろ避けてきた書誌学的研究に首を突っ込まざるを得なくなってきたのである。

宗湛日記は、はつきりした原本がなく、写本のさして古いものもない。それ故書誌学的研究には困難が伴う。しかしながらここまで追求してみると、多少の問題点が浮かびあがったように思われる。

その最大の点は、従来の研究者が、書籍の通例として、まず完全な原本があり、それ以後は写し崩れの連続と考えていたらしい観点を改めてみた点である。三部作の完成を以て原本の成立とみなせば、4. の段階を以て原本とすべきであり、その点で劉家本を定本としてきたことも間違いではないのであるが、実はその前に長い前史があったのではないだろうか。

幸いに助成の継続が認められれば、新しい観点に立って、付表第1表から第3表までの改定が進捗し、その結果はわれわれの個別研究に大いに役立つであろうし、また多くの研究者の研究に寄与することが出来るであろう。

付表 第1表 宗湛日記内容一覧表(日別)

〔天正十四年十二月二十一日 草部屋道設の御会〕

この御会は、日記、献立、ハリ紙の3種の記録がある。
 〈*〉印は、日記中に詳細な説明があることを示す。

元号	年	西暦	月	日	時刻	連客	亭主 屋敷	茶室	ト書	床の間	道 具										出典				
											炉まわり	壺	釜	水指	茶 器		茶 碗	建水	蓋置	その他	本文	献立			
															濃茶	薄茶							濃茶	薄茶	
天正	14	1586	12	21	朝	1	草部屋道設	深3	御会	床*	いろいろ				古蒲団形籠被釜*								149-150	7	
						宗湛	堺	勝手内に 深3半*	尺ほどの小棚あり 小棚の下に 棚に						貫 弦	土水指 眞蓋									
									手水の間に 勝手量中央に																
									濃茶																
									薄茶のときは 其外道具同																
					晩	2	晴庵	平3	御会		いろいろ				新釜	つるべ								151	8
						宗湛 宗傳	堺				大燈墨蹟* 本紙1.1*1.0				自在										
					夜咄	4	忙閑		振舞*															151	9
						松波 了心 宗湛 宗傳	堺																		

付表 第2表 諸写本一覽表

1) その他 日記の記載期間により分類。
 系統別 日記中の図から同一系統とおもわれる写本を仮にグループ化

系統別	写_活字	略称	書写_出版	筆者	献立有無	献立期間	ハリ紙	馬の絵	確認
1. 天正 14 年 10 月～天正 20 年 4 月 14 日まで断続									
ク-1	写本	続群書類従_書陵部	1811(文化 8)		なし		なし	-	済
ク-2	写本	続群書類従_公文書館	明治		なし		なし	-	済
ク-3	写本	続群書類従_東博	1825(文政 8)	茶仙堂	なし		なし	-	済
ク-4	謄写本	続群書類従_史料編纂所	1879～1885(明治 18)		なし		なし	-	済
ケ-5	活字本	続群書類従	1925(大正 14)		なし		なし	-	済
サ-1	写本	九大本			なし		なし	なし	済
2. 天正 14 年 10 月～慶長 4 年閏 3 月 25 日									
イ-1	写本	神屋本							未見
イ-2	謄写本	神屋本_史料編纂所	1881(明治 21)		なし		なし	なし	済
キ-1	写本	平岡本	明治						未見
キ-2	活字本	平岡本_審美書院初版	1909(明治 42)						未見
キ-4	活字本	平岡本_随筆文学選集	1927(昭和 2)		なし		なし	なし	済
キ-5	活字本	平岡本_新修茶道全集	1956(昭和 31)		なし		なし	なし	済
コ-1	写本	国会図書館忠篤本	1839(天保 10)	忠篤	なし		なし	なし	済
コ-2	写本	静嘉堂本			なし		なし	なし	済
サ-2	写本	慶應籌庵本	1857(安政 4)	西宮以文	なし		なし	なし	済
シ	写本	筑紫本		松永一豊					未見
チ	写本	大分県立図書館本	1854(嘉永 7)	後藤碩田	なし		なし		済
3. 天正 14 年 10 月～慶長 5 年 4 月 2 日									
カ-1	写本	慶應朝吹本	1690(元禄 3)	安樂軒日休	なし		なし	なし	済
カ-2	写本	久田本							未見
4. 天正 14 年 10 月～慶長 18 年 12 月 9 日(慶長 5 年欠)									
ア-1	写本	劉家本							未見
ア-2	活字本	劉家本+山内本_茶道古典全集	1967(昭和 42)		なし		なし	有	済
ア-3	影印本	劉家本_影印本	1984(昭和 59)		有	天正 14 年 12 月 10 日～慶長 18 年 5 月 27 日	なし	有	済
イ+ウ	写本	京大本_神屋本+山内本	1822(大正 12)		なし		有	有	済
オ-1	写本	森川如春庵旧蔵本	1766(明和 3)						未見
オ-2	写本	国会図書館遅松本	1766以降	大橋遅松	有	天正 14 年 12 月 10 日～慶長 18 年 5 月 27 日	有	有	済
キ-3	活字本	平岡本_審美書院再版	1921(大正 11)		有	天正 14 年 12 月 10 日～慶長 18 年 5 月 27 日	なし	なし	済
ケ-1	写本	国会図書館二休本	江戸末		有	天正 14 年 12 月 10 日～慶長 18 年 5 月 27 日	なし	なし	済
ケ-2	写本	今日庵本	1777(安永 6)		有	天正 14 年 12 月 10 日～慶長 18 年 5 月 27 日	なし		済
その他									
ウ-1	写本	山内本							未見
ウ-2	謄写本	山内本_史料編纂所	1918(大正 8)		有	天正 14 年 12 月 9 日～慶長 4 年 3 月 25 日	有	有	済
タ	写本	福岡県立図書館本			なし		有	有	済
ス	写本	武居本							未見
エ	写本	黒田本							未見
セ	写本	許斐本							未見
ソ	写本	奥村本							未見

付表 第3表 日本文献比較表

「天正十四年十二月二十一日 草部屋道設の御会」諸本の記述を並列

1. 茶道古典全集 活字本 (ア・2) 3. 西日本文化協会 劉家 活字本及び劉家本

天正十四年十二月二十一日
 ●尾道茶室、活字本(活字本)

廿一日御會
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人

●西日本文化協会、活字本(活字本)

廿一日御會
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人

2. (ア・2) 続き及び西日本文化協会 劉家 活字本

●尾道茶室、活字本(活字本)

廿一日御會
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人

●西日本文化協会、活字本(活字本)

廿一日御會
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人

印影本 (ア・3)

●尾道茶室、活字本(活字本)

廿一日御會
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人

●西日本文化協会、活字本(活字本)

廿一日御會
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人

4. (ア・3) 続き

一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人
 一ノヤテテ座敷内、御座敷、念庵上人

